
おや？五周目の一刀君の様子が.....

ふいおん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おや？五周目の一刀君の様子が……

【Nコード】

N9034R

【作者名】

ふおん

【あらすじ】

何回もの外史を繰り返し経験した北郷一刀。時には魏にて霸王曹操を大陸の王へと導き、時には呉にて天下三分へと導き、時には蜀にて王となり大陸の行く末を争った。その三国いずれにも拾われぬ外史をも渡り歩き、今五度目の外史が始まりを迎える。

始りはいつも荒野で（前書き）

注意：今作の主人公は北郷一刀という名前ですが、性格がまったく異なります。

それをしっかり踏まえご覧ください。

始りはいつも荒野で

「んあ？ここは一体……」

ふと、目の前の景色に意識を向けると、見渡す限り荒野が広がっていた。

俺は何をしてた？

今までの記憶が吹っ飛んでいる。

「俺は北郷一刀。聖フランチェスカ二年で、所属クラブ無し」

一年途中まで剣道部に入っていたが、規則だの何だので好き勝手にしないので止めた。

自分の素性は覚えている。抜けているのはこの状況に至る経緯。

「どうしたもんだが……」

このありえない状況に、何故だか冷静で居られる自分に関心する。この感じ、初めてじゃない……？
とりあえずポケットから携帯を取り出す。

「チッ。圏外か」

携帯は使い物にならないらしい。
どうしたもんか。

「おう兄ちゃん。珍しいモン持ってるじゃねえか」

と、携帯をポケットに放り込もうとしたその時、壮齡の男の声が聞

こえた。

声に振り返ると、そこに居たのは三人組の男。

「……何だあんたら。コスプレか？」

思わず口からだが、三人とも不思議そうな顔を浮かべるだけ。

「何言ってるんだ、こいつ」

「さあ？あつしに聞かれても……」

まあいい、とりあえず現状確認だ。

「なあ、ここどこなんだ？」

「……はあ？」

「気がついたらここに居たから場所が把握できなくてな。携帯も圏外だから使い物にならん。おっさん等の携帯も圏外か？」

まさかその歳で携帯を持ち歩いて無いなんてありえんだろう。

「……アニキ。こいつ、頭おかしいんじゃないすか？」

「ああ。俺もそう思ったところだ」

「あん？」

俺の頭がおかしいだ？

どっちかっていうと話の通じないおっさん等が頭おかしくねえか？

「まあ、とりあえず俺等が言いたい事は一つだ」

その言葉と共に俺の頬に触れたのは、冷たい鉄の感触。

「……あ？」

「そのキラキラ光る服置いてとっとと消えな」

ぴたぴたと頬を叩かれる。

視線を落とすと、それは薄く研がれた刃を備えた……包丁よりも大降りな、ナイフの刃。

「銃刀法違反？……まあどうでもいいが、うぜえ」

ナイフの面を左手で打ち払い、正面のおっさんの腹を殴る。

「ぐッ！」

おっさんは苦痛に顔を歪めナイフを落とす。

落ちたナイフを素早く拾い、逆に蹲るおっさんの頬をナイフでペチペチと叩く。

「急に刃物ちらつかせて脅すとかおっさんら外道だねえ。おっと横の二人、お前等が何かしたら俺は手違いでこのおっさんを傷つけちまうかもしれないぞ？」

おっさんの横にいるチビとデブが俺に向かって殴りかかろうとするところに声をかける。

低い声で唸り二人はすぐさま停止した。

俺はここが何処だか聞いたただけなんだがなあ。まあいい、気を取り直そう。

「で、おっさん達。ここは何処なんだ？」

「ち、陳留だ」

陳留？んなどこ日本にあつたか？

「なあ、ここは日本じゃないのか？」

「にほん？兄ちゃん何言つてんだ？」

通じない。ここが日本ならば通じない訳が無い。

びくびくした面持で俺をみるおっさん達。これ以上聞いても無駄か。俺は持ってたナイフをおっさんから離し、持ち物を確認する。

とりあえずポケットには携帯しか無かった。財布が無いのは困ったな。

「しょうがねえ。おっさん等、有り金置いて消えな」

「ええ！？」

「いや、違うな。ここで痛い目みるか、有り金置いて消えるか選べるな」

驚く三人組に睨みを利かせそう言い放つと、三人とも小さな巾着袋を差し出して、走り去っていった。

巾着袋を開けると、何やら見た事ない硬貨等が入っている。

「つたく……ここは本当に何処なんだ？」

「はっはっは!!」

今度は女の笑い声。少しは一人で考えさせてくれないもんかねえ。
内心溜め息を吐きながら声の方へと目を向ける。

「……ほうほう」

そこには女が三人。槍を持った青髪の白い女と、眼鏡をかけた利発そうな女。そして小さな金髪の女の子。
いい女達じゃねえか。

「お主、盗賊相手に金を奪うとは面白いですなあ」

盗賊……もう驚かねえ。ここは日本じゃないらしいな。

そんな事より、この青髪の女……いいねえ。

まあ、今は辛抱しよう。現状把握が第一だ。

「なああんたら、ここは陳留ってところしいが近くに街はねえか？」

「ここから南に少し歩けばある。私達もそこを目指しているから着いて来るといい。……だが、街に着いたら質問をいくつかよろしいか？」

青髪の女が含み笑いを俺に向ける。
いいねえそそるねえ。

「別に構わねえ。世話になる」

背を向ける三人に着いて行く。

まだここが何処だかも把握できてないが、何だかいろいろと楽しめそうだな。

一刀の思惑（前書き）

そろそろ本性が……

一刀の思惑

街に着き、とりあえず俺等は飯屋に入った。

1：3で対面に座る。なんだか面接みたいだな。

「して、北郷殿の生国は？」

「日本っつー島国なんだが。知らないか？」

「風、稟、分かるか？」

「聞いた事が無いですね」

「私ものですー」

やはり……か。予想通りの答えが返ってくる。

ちなみに自己紹介は道中に済ませた。

青髪の女が趙雲。眼鏡の女が戯志才。金髪の女の子が程立だそうだ。その名から予想するに、俺はタイムスリップをしたのだろう。

趙雲が女であることは解せないが、頭の中でそう考えると何故かストンと気持ち治まる。

……何だこの、既視感ともとれない感情は。

「北郷殿、いかがなされた？」

と、思考を止め声に耳を傾ける。

「っと悪い、ちょっと考え事してた」

「ふむ。では北郷殿はにほんという所の豪族と見受けられるが、違うか？」

豪族？何故？

……ああ、服装か。こんな素材の服なんてこの時代には無いだろうからな。

「その豪族って奴の定義が分からんが、恐らく違う。俺は……」

と、あの荒野に至るまでの前の記憶が無いことを告げる。

タイムスリップに関しては、信じてもらえるとは思えないので話さない。

「……うーむ、何と面妖な。どう思う風、稟」

「お兄さんが嘘をついてる様には見えませんがー……正直信じるに値する証拠が欲しい所ですねー」

「風の言う通りかと」

と言われてもねえ。携帯でも見せりゃいいのか？まあ面倒だからいいか。俺的にや信じてくれてもくれなくてもどっちでもいいしな。

「まあそれは置いといて、俺も聞きたい事があるんだが」

「何ですかー？」

「あんたらが言い合ってる、程立で言う……風か。それって……何だ？と続けようとした瞬間、眼前に趙雲の槍が向けられていた。ピリピリとした殺気を肌に当てられる。」

「貴様……いきなり人の真名を呼ぶとはどういう了見だ！」

「て、訂正してくださいっ！」

「あん？」

こいつらは何をそんなに怒ってるんだ？

まあ雰囲気的に明らかに俺に責があるんだろう。

「分かった、訂正するよ。悪かった」

両手を挙げて降参のポーズ。

「結構……」

すると、趙雲が槍を収め、程立が安心してように息を吐いた。

「んで、その真名って奴は何なんだ？反応からに重要な事何だろう？」

「……北郷殿は本当に真名について何も知らないのですね。いいですか、真名というのは……」

と、説明を受ける。

何だその初見殺し。ここで聞いておいて正解だったな。

「おーけー把握した。さっきは俺が悪かったんだな。本当にすまん」

「おーけ……？まあいいですよー。本当に知らなかった様ですし」

のほんと程立に返される。

いやぁ可愛いねえ。あと数年もしたら食べ頃か？

「北郷殿は武の心得がお有りか？」

「ん？まぁ一応じじい……祖父に昔扱かれた事もあってかそこの男共よりは強いだろうな」

んでも、この時代に来てからどうも体の調子がおかしい。

悪い意味ではなく、良すぎておかしいのだ。

元の時代の時の俺とは比べ物にならないくらい戦える。

実際にまだ試していないが、そんな気がする。

つたく、本当に俺は何をしてたんだ？

「いや何、先程私の殺気を受けてなお、その飄々とした態度を変えなかったのだな」

まあ、そういうの慣れてるからな。

……ん？慣れてるってなんだ？俺に向けて殺気を当てるなんてじじいくらいだったけど、じじいとのお鍛錬も何年も前の事になる。

あーわかんねえ。もやもやする。

まあいいか、ここが現代の日本でないことは分かった。

どうせなら好き勝手やらせてもらおう。

まず手始めに……

「一つ、提案がある」

「何だ？」

「趙雲、俺の女にならねえか？」

「……は？」

目の前の良い女を、いただくとするか。

一刀の思惑（後書き）

始めはもうちょっと好き放題暴れる予定だったんだけどなあ。
まあこれからでも遅くはないか。

蘇る（前書き）

今作初の戦闘描写です。

個人的に一騎打ちとかって、実力がすごーく伯仲してないとすぐ終わると思うんですよね。

なので結構あっさりしちゃってます。

蘇る

「北郷殿、準備はよろしいかな？」

「おう。いつでも来い」

街の外を出た荒野に、俺と趙雲は武器を構え向き合っていた。
事の経緯は趙雲の一言。

『私を自分の女にしたければ、最低私よりも強くなくてはな』

との事。

まあこんな美人を自分のものにできんなら多少の困難は乗り越えて
みせよう。

さて相手は女だが、三国時代の英雄趙子龍。腕は相当のもんだろう。
静かに槍を構えるその姿勢から、幾分の間も伺えない。

俺は外へでる途中、鍛冶屋で安く譲ってもらった直刀を構える。

「では……参る！」

息を吐きながら踏み込み。

繰り出された突きを躲し、追撃の横薙ぎを直刀で受け止める。

「チッ！」

受けた直刀が金切り音と共に弾かれる。

なんつー威力。女の臂力じゃねえな

勢いそのままに後ろへ飛び距離をとる。が、趙雲はさらに踏み込み
槍を振るう。

まともに受けてたら武器がもたねえな。

絶え間ない斬撃を可能な限り避ける。無理なものは受け、直刀を傾け力を逃がす。

「逃げてばかりでは勝てませんぞ？北郷ど、のッ！」

声に合わせ振るわれる豪撃。今までとは速さが段違いだ。

いいねえ腕が鳴る。俺は迫る槍の穂先を紙一重で避け、柄へ直刀を振り下ろす。

「ッ！」

流石に真つ二つには出来なかったが、その衝撃に槍を落とさんと踏ん張る趙雲。

隙、できたな。

趙雲の硬直に合わせ懷に潜り、空いた鳩尾に肘を叩き込む。

「かはッ」

方膝を着きしゃがみ込む趙雲。それでも武器を手放さなかったのは流石ってところか。

「終わりだな」

直刀を首にそえ、告げる。

悔しそうに唇を噛み締め睨まれる。

おいおいそんな表情するなよ。煽ってんのか？

「約束、守ってもらっぜ」

「なッ！」

俺を見上げる趙雲の顎を取り、唇を奪う。
瞬間、脳裏に照らされる光景。

屋根の上。夕日に照らされ、纏めた髪を風にふためかす趙雲。
その後ろ姿は幻想的な美しさに満ち溢れている。

『この身も愛も魂も、全て貴方に賭けている。それは、愛紗や朱里も同じでしょう』

『……………』

『それに全て応えろとは言いません。ですが、忘れずにいて下され。さすれば、例え戦場に屍を晒すとも、心だけは貴方と共に居ることが出来る』

『……………忘れるわけないだろう。だから、星も死なないでくれよ？』

『ふっ。主のご命令とあらば、冥府の番人すら打ち倒してご覧に入れましょうぞ』

ふと、景色はフェードアウトする。

目の前に居るのは顔を赤く染めた趙雲。
何だ今のは。あの趙雲と会話していたのは間違いなく俺だった。
だが俺にそんな覚えは無い。まして趙雲に会ったのはついさっきだ。

「主……^{あるじ} なのですか？」

「あ……？」

と、目の前の趙雲の顔が妙に熱っぽい。

瞳は濡れて、いつもの俺なら我慢できず襲い掛かる程だ。だが今は先の現象に頭が着いてこず、うろたえる事しかできない。

「主……主い！」

感極まった様子で趙雲が俺に抱きついてくる。

何なんだ一体。願っても無いが、流石に意味がわからん。

「お、おい趙雲！」

「ぐす……」

今度は急に俺の胸で泣き始めた。

門の方へ向き、程立と戯志才へ助けの視線を送るが

「ふがふが」

「はい稟ちゃん。とんとーん」

鼻血を出した戯志才を程立が介抱していた。何で鼻血……？

「はあ」

溜め息を吐く。とりあえず趙雲が落ち着くまで何もできんな。それから俺は数十分趙雲を抱き立ち尽くしていた。

「急に取り乱して申し訳ない。だが、主が急に接吻などするからですぞ？」

「……ああ、だが俺は勝負に勝ったからな」

今俺らは街に戻り通りを歩いている。街灯の無いこの時代。月明かりにのみ照らされる街並は先程初めて見た時に息を飲んだ。それはともかく、勝負が終わってから趙雲の豹変ぶりに、程立も戯志才も驚いていた。妖術などと言われ俺に鋭い視線をぶつけてきたが、趙雲が割って入り今は治まっている。

「……とりあえず今日はもう宿を取って休みましょう。北郷殿にも星にも、いろいろ聞きたい事があるので明日きっちり吐いて貰います」

無然とした面持ちで戯志才が言い放つ。
吐いて貰うと言われても、何故趙雲がここまで様変わりしたのか、俺にもわからないのだが。

「ふー」

寝台に座り、手で握りこぶしを作る。

やはり俺はこの時代に着てから想像以上に戦える様になっていた。理由等はもう考えない事にする、考えたって分かるわけないしな。あの趙子龍と戦い、勝つ事ができるのだ。これは大きな儲け物だろう。

と、急に部屋の扉が開かれる。

「……来たか」

「おや、主は私の考えなどお見通しという事ですか？」

部屋に入ってきたのは趙雲。話をしに来ると思っていた。相も変わらず挑戦的な笑みを浮かべている。

さて、色々と聞かせてもらおうか。

我が道を行く（前書き）

この一刀君は読者の賛否両論がはつきりしそうですねえ。

我が道を行く

「そうか……俺が、なあ」

趙雲から聞いた話。

端折って言えば俺がこの時代に降り、劉備等と共に大陸に平和をもたらす為他国と争い、結果天下三分が成された。しかし、世が平定されたと同時に俺の姿は消え、いくら搜索しても見つからず、蜀の将らは大層嘆いたらしい。

その記憶が、俺とキスをした際に蘇ったらしい。一応、キス直後の趙雲の取り乱し方にも納得がいった。

それを聞き考える。どうやら俺はただタイムスリップしたんじゃないく、同じ時期を何度も繰り返しているようだな。

まあだが趙雲の言うそれは劉備と共にこの時代を渡った俺なのだろう。

話の俺は糞がつくほど甘く、自身の武もからきしだったらしい。今の俺には考えられん。

それを趙雲に伝えると、何故か笑われた。

「主、私にはわかるのですぞ？いくら今の主が粗暴に振舞おうが、人の心根は変わらぬものです」

見透かした様な趙雲の顔に苛立ちを覚える。

「……俺は良い女だったら誰でも抱く軟派な男だ。趙雲の言う俺とはかけ離れてるんじゃないかい？」

「それこそ主の心根ではありませんか。我らが将何人と関係を持つたと思います？」

……おい俺、甘くて弱かったらしいが女に関しては別なのかい。
こりゃ舌戦じゃ勝ち目は薄い。さっさと戦利品をいただくとしよう。
俺は趙雲の腕を引き、抱きしめる。

「おや、話はもう終わりでよろしいので?」

「ああ。このまま趙雲と話してたら気が削がれちまいそうだね」

「星、とお呼びください主」

視線を下に、照れながら顔を朱に染める趙雲……いや、星。
血が滾る。とうとう俺は辛抱できなくなった。

「……星、今夜は寝れると思うなよ?」

「ふふ、望むところですね」

ああ、今夜は良い夜になりそうだ。

「う……ん……主い………!!」

窓から注がれる日に、寝起きのまどろみを捨て飛び起きる。
何故か、それは隣にあるはずの温もりがすでに無く、寝台に寝て
いたのは私だけだったからだ。

「主ッ！主は……」

昨夜主が脱いだ服は既に無く、壁に立てかけられた武器も無くなっている。

再会した主は、私の記憶に無い性格……悪く言えば悪漢とも取れるものだった。

しかし体を重ねた今ならば昨日よりも確信し言える。
あれは紛う事無く私が慕い申し上げる主であると。

「ふふ、いいでしょう。この趙子龍、必ずや主とまた……」

寂寥を捨て、強がりながらも一人微笑を浮かべる。
逃げるのならば追うまで。私はもう、主以外の男と添え遂げるなど考えられぬのですから。

「あー、気持ち悪」

朝早くから馬車に揺られ軽く酔ってしまった。

今俺は商人隊に混ざり別の街へ向かっている。

一応俺がどのくらいの武を持つてるか確認できたので、用心棒と
いうことで乗せてもらった。

しかし星は良い女だったな。記憶では経験があるみたいだが、やはり体は初めてだった。

最初こそ苦しげにしていたものの、途中からは良い声で鳴いてくれた。

一度で手放すのももったいないが、聞けば史上の英傑共は全て美女化してるらしい。

となると、これを頂かない手は無い。さっさと行動に出ないとな。

「曹操、孫権、劉備辺りは期待したいがねえ」

何たってあの三君主だからな、期待しない方がおかしいってもんだ。劉備辺りはキスでもすりゃ記憶が蘇って楽に寝れそうだが、そんなもん俺の望むべくじゃねえ。

良い女を抱くには、それ相応の難関が無いとな。やりがいつてもんがねえ。

ま、とりあえず地理も何も把握してない今は情報を集めながら路銀を稼いで放浪してみようかね。

運が良けりゃどっかの英傑とばったりつても考えられるしな。

我が道を行く（後書き）

作者は三国志の街の名前とかそういう知識は皆無です。それを踏まえてもらえるとうれしいです。

賊で結構（前書き）

まだだ……！

まだこの一刀の本領は発揮されていない！

賊で結構

商人隊と別れて数日。街で適当にぶらぶらしながら情報を集めていた。

しかし考えてみればまだ黄巾の乱が治まって無いつてことは群雄割拠の世とやらにはなっていない。

まだまだ劉備達も無名ってこった。

なら俺は順を追っていくまで。

街でちらほらと見る頭に黄色い布を巻いた男達。

一人を呼び寄せ、路地裏へと向かう。

「おい、いきなり何の用……ぶべッ！」

有無を言わず頭を剣の柄で殴り気絶させる。

男の懐を探り財布、そして頭の布も取る。

「張三姉妹か……うまくいきや4Pか？」

とりあえずは兵として動いてやろう。だが行く行くは……

「らあ！」

袈裟切りで、官軍兵を鎧事叩つ切る。

俺の周りには官軍兵の死体だらけ。単騎駆けし、好き放題暴れた結果だ。

「おいお前ら！官軍共何て大した事ねえ！このまま突撃だ！！」

野郎共の士気を上げ、俺は後退する。

この戦も俺らの勝ちだな。やはり数があるだけ、俺みたいな奴が居りゃ戦を優位に運べる。

「そこのお前！待て！」

凜とした声が戦場に響く。俺は止まり後ろを見ると、大きな斧を持った銀髪の女が勢い良くこちらに駆けて来ていた。お、こりゃあ当りを引いた様だ。

女は俺の前で馬から降り、斧の切っ先を向ける。

「貴様、少しは腕が立つようだな。私と戦え！」

「仕合うつてのか？かまわねえが、名を名乗りな」

俺は剣を構え鋭く女を睨みつける。

「賊等に名乗る名は無いと言いたい所だが、貴様の武に免じて名乗ってやろう。我が名は華雄！死と共にこの名を心に刻むがいい！」

華雄か。見たところ自分の武にかなりの自信を持っているようだな。よし、屈服させてやるか。

「俺は北郷。お前に勝ち、お前の主人となる男だ」

「ぬかせ！はあああああ！！」

声と共に斧を振り下ろす。

横に飛び躲すが、轟音と共に地面は抉られ、その威力を物語った。

こりゃあ受け流すだけでも腕が持つてかれそうだな。
数回斧を振り回す。

おいおい何度も見せちまっつていいのか？
鋭く迫る斧の孤影はもう慣れた。重い武器故にある力の溜めを俺は見逃さない。

斧の構えとは逆の、左側へ剣を振るう。
華雄は無理に斧を向かせ何とか防ぐが、弾かれると同時に左腕で華雄の右腕へ掌底をかます。

「ぐう！！」

無理やり動かした右腕じゃ辛いだろう？
耐え切れず斧を落とした華雄の腹に靴底を見舞う。
情けなく倒れこんだ華雄の髪を掴み、顔を無理やり眼前へと持つてくる。

「はい俺の勝ち。お前は肉奴隷完全調教コースだ」

「く……かはッ」

腹を蹴られて苦しいのだろう。文句も言えず顔を歪める華雄の頬を舐める。

と、敵陣から駆けてくる馬が見えた。

「おらあ！！」

「チッ」

馬上からの一撃をその場から離れ躲す。

支えが無くなった華雄は倒れこんだ。意識を失ったんだろう。意識を敵に戻す。

駆けてきたのはこれまた女。晒を巻いた威勢の良さそうな美女だ。その女は俺を一瞥すると、素早く華雄を馬に乗せる。

「おいおい不意打ちかよ。武人の風上にもおけねえなあ」

まあ俺は武人でもなんでもねえからそんなに気にしてないが、せつかく手に入れた女が奪われたんだ。このくらい言わせる。

「ごめんなあ兄さん。うちも銀華を失うわけにはいかないんや」

「許さん。お前が変わりに俺の女になるんなら納得してやるが？」

俺の言葉に呆気にとられた顔をする。

「兄さんおもしろいなあ。うちの名は張遼。覚えといて損は無いと思うで」

喋りながら自らも馬に乗り踵返す。

おいおい逃げる気満々じゃねえか。流石に馬にや追いつけねえ。諦めるしかねえか。

「チツ。起きたら華雄に言っておけ。お前は既に俺の女だ。ってな」

「そないな事言ったら怒り狂うで……まあ銀華の不遜の代償やな。伝えたる。ほなまたな」

走り出す張遼の背に、俺は声を投げかける。

「お前も、いつか俺の女にしてやるよ」

聞こえるとは思わなかったが、張遼は顔だけこっちに向け挑発的な笑みを浮かべながら口を動かした。

「『できるもんならな』か」

面白い。やってやろうじゃねえか。
ま、機会があればだけどな。

「兄貴！ここにいたんですかい」

「あ？」

黄巾の兵が俺を呼ぶ。

話を聞くと、俺の働きがよかったので張三姉妹から直々に褒美が貰えるらしい。

願ってもねえ。

よく開かれる公演だかなんだかで容姿は既に把握済み。三人共上物だ。

ああ、早く抱きてえなあ。

賊で結構（後書き）

華雄の真名は『銀華』です。
銀髪に華雄の華をとって銀華。
そのまんますぎかな？

筋書きは無い（前書き）

一刀の口調が安定しない……違和感あったらごめんなさい。

筋書きは無い

「ふーん……へー……ほー……」

俺は兵に案内されて三姉妹のいる天幕に入ったんだが……

張角が俺を下から上まで舐めるように見てくる。

何だっってんだ一体。

「うーん……いいよー。ギリギリで合格にしてあげるね」

「えー。ちいはちょっと物足りないかなあ」

「天和姉さんが良いなら、予定通りに話は進めるわよ。ちい姉さんは我慢して」

「あん？」

俺抜きで進められていく話。

どうしたもんかと立ち尽くしていると、張梁がこちらに寄ってきた。

「ありがとうございます。貴方のおかげで今のところ私達の軍は勝つ事ができてるわ」

「そりゃどうも」

あまり感激の念が見られない俺に、張宝が訝しげに睨み付けるが気にしない。

張梁は気にした様子無く続ける。

「褒美として、貴方を私達の親衛隊に任命します」

「親衛隊？」

「私達の身の警護が仕事よ。光栄に思いなさい！」

張宝は威勢よく俺に向かい指をさす。

なるほどね。武将をも退けられる俺を近くに置いて、安全を図ろう
つてことか。

「そいつは重畳。これで話が終わりなら失礼すんよ」

後ろからの呼び声を無視し、天幕を出る。

親衛隊か。接する機会も少なからずあるってこつたな。
なら正攻法でいってみるかな。

「待ってください」

と、思案を固めると同時に声かけられる。
振り向くとそこには張梁が立っていた。

「まだ話があったのか？」

「……何を企んでるんですか？」

脅えるように両手を胸に当て話す張梁。

ああなるほどねえ。俺を見た限り三姉妹を妄信してるわけでもない
のも明白か。

「人和」

公演の時に名乗ってるし真名で呼んでもかまわんだろう。
俺は張梁の真名を呼びながらその頭を優しく撫でる。

「企んでるか？と言われるとそうなるな。だが安心していい。俺は
何があるうとお前等を守るさ」

まだ抱いてもいない良い女を骸にされたら堪らんからな。

張梁は少し呆けていたが、すぐに俺の手を払いのけ距離をとる。

「せ、責務をしっかりとこなしてくれるのなら文句はありません。で
はまた」

急いで踵返す張梁。嫌われたもんだねえ。

まあいいさ、とりあえずは張角狙いでいくかな。あの中じゃあいつ
が一番楽に落とせそうだ。

「だりーなおい」

あれから結構経ったが、親衛隊といっても張梁と事務的な事ばかり。
それ以外の触れ合いなど皆無だった。

さらに、俺等の連絡隊が敵に捕まったらしく本陣がばれてしまった。
おかげで今まさに奇襲を受けている。兵共は慌てふためいて戦どこ
ろではない。

まったく、思い通りにいかないもんだ。

周りを見渡すが、こりゃ負け戦だ。あの三人は早々に逃げ出したら
しい。

手際の速さに呆気にとられたが、生きているならいい。そのうちまた会えるだろうよ。

「兄貴！ここにいましたか！」

「んだよ、俺は今からずらかるんだが？」

「張角様達が敵將に追われております！」

何だって？

「すぐに案内しろ！俺が行く！」

守ってやるって言っちゃったからな。最後までいちゃんと働いてやるよ。

戦場から離れた荒野に人影が4人。

三姉妹と手甲をつけた物々しい傷だらけの女。

「……諦めましょう、姉さん。このままこの人から逃げ切れるわけ無いわ」

顔を伏せ沈んだ面持ちで投降しようとする三人。
まあさせねえけどな。

「おらよー！！」

走りながら勢いを乗せて剣を振り下ろす。

敵の女は両手で防いだが、勢いで数メートル後方に吹き飛んだ。

「一刀さん!？」

「よお、無事か？」

三人に怪我した様子は無い。なら大丈夫だな。

「ここは俺が抑えるからお前等は早く逃げな」

「……はい、でも一刀さんも無事で……！」

急いで走り去る三人。俺は視線を敵の女へ戻す。

「……逃げた主をなお庇うか。なかなか見上げた根性だな」

「まあ、約束しちまったからなあ」

何があるうと守るってな。一度くらい守らねえと目覚めがわりい。
相手は見た感じ将に上がりきってないひよっこだな。華雄以下だろ
う。

「我が名は楽進。曹操様の覇道を支える家臣の一人だ」

「北郷だ。ついでにお前も俺の女にしてやるよ」

「なっ!……前言撤回させてもらっぞ、下種め。はああああっ!」

顔を真っ赤にする楽進。初心だねえ。

俺の首を刈り取ろうとする上段蹴り。

筋はいいが読みやすいねえ。首を少し傾け避ける。

攻勢に転じようと構えるが、楽進の後方から砂塵が見えた。

「増援か。流石に分が悪いな」

袈裟切りからの柄当て、そして流れるように足払う。

楽進は何とか防ぐが足払いには対応できなかった。

こける楽進を一瞥し、その場を走り去る。

はあ、この時代にきてからまだ星しか抱いてねえじゃねえか。
本当、思い通りにいかないもんだねえ。

譲れない獲物（前書き）

テンポ良くいきたいのでどんどん進みます。

譲れない獲物

黄巾党が治まって少しは落ち着くと思ったが、この世界は俺が思っている以上にせつかしい。

あれから俺は街を転々としていたが、とうとう金が尽きたので徴兵に乗った。

規則に準ずれば飯と寝床が確保され、給金もでる。

それほど大きな勢力でもないのに、開墾や訓練もどつという事はない。

力を抜いて、そつなくこなしていった。

このまま金を溜め、また英傑等を捜しに旅をしようと目論んでいたのだが……

「こうそ……公孫……でてこねえなあ」

今俺は、？水関から離れた場所で仲間の兵と共に陣を展開している。反董卓連合に、主君が参じたのだ。さらに、総大将である袁紹の挑発を受け、先陣を出す羽目になった。

その阿呆な主君の名前を思い出そうとしているのだが、何故か思い出せない。

「うーん………ああ、公孫賛か」

そうだ公孫賛だ。王座に座る彼女を見た事があるが、威厳というものが全く無かったので印象が薄かった。あれも良い女だとは思うが、流石に主君を襲うわけにはいかないの

で我慢している。

俺としては連合に参加してくれた公孫賛に感謝したい。

お陰で、遠目だが色んな英傑を見る事ができた。

劉備と曹操、そして孫策。孫権は居なかったのが残念だが、これらをお目にかかれた事自体が僥倖だしな。贅沢は言えねえ。

劉備は期待通りの美女だったが、曹操に関しては落胆せざるを得なかった。

あれなら横に侍らせていた女二人のが抱いてみたいねえ。

劉備軍の天幕を覗き見していた時、驚いたというかやはりというか、星の姿があった。

今回も彼女は劉備に組するのだろう。俺には関係の無い事だが、何も言わずに別れて来たのであればたら面倒な事になりそうなので注意しよう。

この？水関攻略戦、劉備軍との共闘らしい。

流石に戦場でばったりつてのはありえないと思うが、今回は普通に兵を気取ってるか。

そう心に決めた矢先、？水関の門が開き兵が出てきた。

黒髪の綺麗な姉ちゃん何か言ってたが、そんな易々と挑発に乗るもなかねえ。

旗は……『華』か。

董卓軍で旗が華っていったら、あいつしかいねえな。

敵兵が迫ってきたため、自軍も行動を始める。

ついさっき一兵を気取って決めたんだが、早々に覆す事になるとはな。

流れに乗り、俺は前線へと向かった。

「うりゃりゃーッ!!」

「くう……!!」

華雄の姿が見えないんで前線どころか敵陣のど真ん中まで進んでしまった。

敵兵をなるべく避け急いで来たが、漸く見えた。

華雄は赤髪の子供に押され防戦一方になっている。

あの武器……丈八蛇矛。てことはあの子供が張翼徳か。そりゃ華雄には荷が重い相手だな。

襲ってくる敵兵の首を刎ねながら冷静に分析する。

「これで……最後だぁーッ!!!!」

華雄の斧が弾かれ地に刺さり、続け様に丈八蛇矛が振り下ろされる。こりゃやばい。

敵兵を蹴り飛ばし、全力で駆け華雄の前に立つ。

「ぐ……おお……ッ!」

刀背に左手を沿えまともに受けた。

大きな金切り音と共に、衝撃が襲い掛かる。

全身が軋む。だが、受け止めてやった。張翼徳渾身の一撃を。

「な、何者なのだ!」

その場から飛び退き警戒する張飛。

「貴様! 敵兵が何故私を庇う!!」

冷静に頭を働かせる。この場に居るのは華雄の兵と張飛。張飛と相対した今、俺は一人敵に囲まれてる事になる。この場を脱するには……これだな。俺は振り向き華雄の腹に拳を叩き込む。

「貴様は……かふッ！」

顔を驚愕に染め意識を失う華雄。倒れこむ彼女を抱き、口を開く。

「聞け！我が軍は今劣勢にある！直ちに退却せよ！」

俺の言葉にざわめく兵達。

華雄を助けた場面を見た兵共が味方だと判断したのだろう。大きな声で復唱する。

「悪いな嬢ちゃん。この場は退かせて貰う」

「……別にいいのだ」

警戒した様子を崩さず、張飛は答える。

俺は華雄を片腕に抱いたまま馬に乗り、？水関へと駆ける。後ろを一瞥すると、張飛が静かにこちらを睨んでいた。

「鈴々！無事か！？」

「愛紗……」

華雄軍が退却し、進軍を始めた劉備軍が眼にしたのは、静かに立ち尽くす張飛の姿。

関羽と趙雲が急いで駆け寄るが、張飛に怪我は無い様だった。

「怪我は無いようだな」

「うん、大丈夫なのだ。でも……」

先の出来事を話す。

華雄を打ち倒す寸前、乱入してきた公孫賛軍の兵。身なりは一般兵だったが、渾身の一撃を受け止められた事。

「何と……董卓軍の敵将が味方に紛れていたのか」

「恐らくはそうだろうな。しかし白蓮殿の軍からか……誤解を招かんといいが」

「それは大丈夫だろう敵兵に囲まれていた故、それを知るのは敵兵と鈴々のみだ」

関羽と趙雲が情勢について話し合うが、その間も張飛は静かに？水関を睨みつけていた。

自分の一撃を受け止めたあの男の顔が脳裏をよぎる自然と、握りこぶしに力が入る。

「次に会ったら……絶対に倒すのだ」

赤髪の少女は、その小さな身体の中に大きな闘志を燃やしていた。

譲れない獲物（後書き）

こんなに戦闘が多いはずじゃなかったんだけど……

最初は一刀に乙女達をバンバン抱かせる物語を書こうと思ったんだけどな……

どうしてこうなった

調教？（前書き）

R - 15だしセフセフ

一刀のセリフが安っぽくなってしまつのは、愛嬌といつとで。

調教？

「確かに私は負けた。貴様の言う事は聞いてやる」

？水関での戦から敗走し、虎牢関への帰還中。

辺りも暗くなり、目立たないよう森へ紛れ天幕を作った。

今俺の居る天幕の中には意識が戻った華雄のみ。兵達にはこの天幕付近には立ち寄りぬ様人払いは済ませておいた。

「私の様な無骨者に目合いを求めるなど、貴様も物好きだな」

自虐的な笑みを浮かべ華雄は軽く体を掻き抱く。

その言葉に俺は怒りを覚え、華雄の顎をとり顔を向き合わせ強く睨みつける。

「言う事を聞くといったな。ならお前はもう俺の女だ。俺が選んだ女が無骨者だと？馬鹿にするなよ」

十数センチ先の華雄の瞳に、俺の剣幕が映っている。

「お前は俺が認めた良い女だ。その事をこれから存分に叩き込んでやる」

そう言うと同時に華雄の体を抱いた。

あつ。と華雄から熱っぽい声が漏れ、それが俺の欲望を更に掻き立てる。

首筋に唇を落としながら、華雄の下腹部へと手を伸ばした。

「……本当に初めてか？随分と感じやすいんだな」

「くっ……何を……あう」

「俺に抱かれる事を最初から期待してたんじゃないのか？」

「なっ！そんなわけ……あぁっ！」

「安心しろよ。期待を超える快感を味合わせてやる」

「はぁ……もう……だめだ……早くっ！早くう！」

「急かすなよ。まだ夜は始まったばかりだ」

「ああああ……はぁぁっ！う、ん……あっ、やぁ……」

翌日、俺達は無事虎牢関へと辿り着いた。
城壁上で待ち構えていた軍と連絡を取り、城門を潜る。

「やっぱりあんたやったか。銀華を助けた正体不明の男って奴は」

連絡を聞いたのだろう。張遼が駆け寄ってきた。

「軍を代表して礼を言わせてもらおうで」

「礼なんていらん。俺は俺の女を守っただけだからねえ」

後ろにいる銀華に目配せすると、顔を赤くし俯いた。
それを見ていた張遼が途端。笑い始める。

「ははっ！兄さん、本当にあの銀華を落としたんか」

目尻の涙を擦りながら張遼は腹を抱える。

「なら用意してた礼品もいらんよね。すぐに他の将と顔合わせするから着いてき」

礼品……だと？くそ、早まったか。

というかいつの間にか完全に仲間扱いなのかい。

ま、銀華を助けるためか。ついでに張遼をはじめここの美女も狙ってみるかね。

「ほう……」

お互いの自己紹介を終えた。

張遼は置いとき、呂布と陳宮。

陳宮の容姿は幼く、可愛らしい子供だった。些か呂布に懐きすぎだとは思うが。

呂布は何というか……予想を斜め上に越された。
まさか天然不思議系とはなあ。

しかし纏う空気から武に関しては凄まじいものだとわかる。

「……………」

「ん？」

ふと視線を感じ顔を向けると、呂布とばかり眼が合った。
呂布は何故か眼を見開き硬直している。

「恋殿。どうなされたのですか？」

異変に気付いた陳宮が袖を引くが、反応が無い。

「……ご主人様？」

「は？」

小さな呟き。

が、すぐに呂布は首を横に振りここを後にした。

そういや呂布って星の話だと蜀にいたんだっけか。

しかしキスもしてないのに記憶が蘇ったってのか？

うーむ。よく分かんが、今は気にしなくてもいいか。

「一刀には銀華の副将を務めてもらうで。銀華の手綱、しっかり握ってや」

真剣な顔で俺に頼む張遼。？水関の失態を繰り返すなという事だろう。

まあその点については問題無いな。

「あいよ」

軽い返事に張遼は顔を顰めるが、何も言わずに持ち場に戻っていた。

さて、かなり飛ばして虎牢関まで来たが、そろそろ連合軍が追いつく頃だろう。

少し痛い目を見てもらうぞ、『麗羽』。

調教？（後書き）

最近サブタイトルが思い浮かばない……
結構改編してますが、口調や誤字脱字の修正を気付いたらしてく
らいなので見直さなくても大丈夫です。

不祥の種（前書き）

今更ながら諱の設定は無しの方でいきます。猪々子とか字がわからんからどうしようもないし……

一刀の口調は、濡れ場中だとたまに変わります。

不祥の種

連合軍が虎牢関前に拠点を置き、数日が経った。

虎牢関での籠城戦。やはりこちらが有利に事を進められるが、敵の数が尋常ではない。

こっちも少なからず被害を受けているので、このままではこちらがじり貧だろう。

「なあ、一刀」

さつきからこっちをちらちら見てくる銀華。
落ち着きなく歩き回っている。

「別に出陣でいいぞ」

「本当か!？」

膠着した戦況に我慢がならなかったんだろう。
俺の言葉を聞いた瞬間、目を輝かせ顔を寄せる。

「出陣^でたらもう二度と抱いてやらんがな」

付け足した言葉に、銀華の顔が絶望に染まる。

忙しない奴だな。見ていて飽きん。

「まあまでよ。後二日ちよい様子を見て考える」

連合軍はグループに分かれ交代交代で攻めてきている。
今のグループが攻めている間、他は休んでいるんだろう。

実に効果的な戦略だが、籠城戦にそこまでの人員は必要ではない。俺らも兵が少ないながら同じ様に小隊を組み休む事ができている。向こうと比べ圧倒的に戦う時間が長い分、先に綻びができるのはこちらだろうが、それでも後一週間くらいは持つだろう。

だが、俺は銀華ではないがこの膠着状態に飽き飽きしている。

なのでそろそろ、動きにでるつもりだ。

それが二日後。何故かという。俺の予想通りならその日にここを攻めてくる勢力は……

「やっぱり、『袁』旗だな」

二日後。城壁の上から前方を眺めると、陣を構える大勢の兵。

その中央には風に靡く袁の旗が存在した。

袁術軍は三日前に確認した。よってこの軍は麗羽のもので間違いないだろう。

「一刀！今日は敵陣へ打って出ると聞いたが本当なのか！？」

銀華は金剛爆斧を持ち、既に出陣^でる気満々の様だ。

少しは落ち着いてほしんだがなあ。仕方ない。

銀華の腕を引きよせ、抱くと同時にキスをする。

武器が落ちるのを横目で確認するがお構いなしに銀華の舌を吸い舐める。

目が蕩け、向こうも俺の舌を絡めようと動かし始めるが、そこで俺は口を離す。

「怪我をせず、ちゃんと命令に従えば今日の夜続きをしてやるよ」

「……………はい」

銀華は呆然とした面持ちで武器を拾うと、出陣前の最終確認へと向かった。

計画は事前に話してあるし、これで命令を無視する事もないだろう。

虎牢関の門が開き、銀華の軍が出陣した、

城壁の上から戦況を見極める。幸い両端の崖により、数の不利が若干マシになっている。

といっても無理はできない。銀華には危なくなったらすぐに撤退しろと言っている。

敵兵と自兵の狭間。突出した人影が敵陣へと突っ込み敵兵が空へ吹っ飛んでいる。

銀華、頑張ってるねえ。

同じ様に、俺らの軍の兵もぶっ飛んでいる場所があった。

「あそこか…………よし」

兵を呼びある事を言付ける。

さて、ここからは速さが肝心だな。

「どおりやあああ！……！」

威勢の良い声だねえ。

銀華の兵を楽しげにぶっ飛ばしていたのは、予想通り猪々子だった。

「おいおい、もっと齒応えのある奴はいないのかー？」

斬山刀を肩にかけ歎息を吐いている。

あの表情、調子に乗ってやがるな。

「袁紹軍武將、文醜とお見受けするが」

「ん、誰だ？」

そんな猪々子の前へ躍り出る。

一応、一騎打ち前の形式として幾分丁寧に言葉をかけた。

一息で剣を抜き、切っ先を向ける。

「華雄軍副將。北郷一刀」

「あたいとやろうつてのか？上等！」

武器を構えなおす猪々子。

緊迫する空気の中、飛び掛るため足に力を溜めたその時、

「文ちゃん！ー！」

「斗詩！？」

斗詩の声に、背後を向く猪々子。

おいおい一騎打ちの最中さなかに余所見はいかんだろっ。

「麗羽様が……って、文ちゃん後ろー！」

「え……」

振り向き様に武器を構えるが、お粗末だな。
剣を思い切り振りぬき斬山刀を弾き飛ばす。

啞然としている猪々子の首に片手を回し、その唇を貪った。

「んーっ！」

「なッ！文ちゃんを離せー！！」

金光鉄槌を振りかざしこちらへ駆ける斗詩。

猪々子は俺が離れると、へなへなとその場に座り込んだ。

直ぐに剣を構え直し斗詩を迎え撃つ。

斗詩の武器は一撃が怖いな。あんなのと普通の剣が打ち合えるわけがねえ。

なら如何するか？簡単な話、避ければいい。今の斗詩は怒りに任せ武器を振り回している。

そんな直線的な振りに、当たってやれるほど俺は優しくない。

振り落とされる金光鉄槌を、半身後ろへ下がり避ける。

斗詩は急いで武器を引き寄せようとするが、地に沈んだそれを強く踏みつけそれを許さない。

柳眉を吊り上げ睨む斗詩に、満面の笑みを浮かべながら言った。

「文醜の唇、最高だったなあ」

「ッ！！」

俺の言葉に斗詩は顔を真っ赤にして、武器を離し殴りかかってきた。

迫る右腕を避け掴みとる。

その腕を背後に回し固めをとった。

痛みに顔をしかめる斗詩の首を片手で横に向け、無理やり唇を奪う。

瞬間眼を見開き、体の強張りが抜けた。

固めを外し離れると、猪々子と同じように座り込んでしまう。

と、同時に虎牢関から退却を示す銅鑼が鳴った。

ぎりぎり間に合ったな。

放心して座り込む二人を一瞥し、俺は虎牢関へと退却した。

不祥の種（後書き）

一応最長話。

元々一話が短いから最長っていつても十分短い。
そこらへんは許してください。

洛陽へ（前書き）

大学が始まったので更新スピード遅めになります。

洛陽へ

「このド阿呆が!」

虎牢関に帰つてくると、張遼が額に青筋を浮かべて迫ってきた。理由はわかる。勝手に出陣したことに激怒してるんだろう。

「うちは一刀なら銀華を止められると思って副官にしたんやで」

「まあ銀華なら止められたな。俺が出陣^でたっただけなんだ」

「尚の事悪いわ!」

張遼の意図を知つての行動だからな。

俺も少なからず悪いと思うので、素直に聞き流しておこう。

「霞!ここにいたのですか!」

と、捲し立てる張遼の背後から陳宮が慌てた様子で走ってきた。

「何や!うちはまだ一刀に言いたい事が……」

「洛陽からの報告で、月殿が危ないと!」

その言葉に張遼の表情が一変した。

舌打ちを一つ放ち振り向く。片腕を広げ、羽織を大きく棚引かせた。

「恋を叩き起こしい!部隊の再編や!夜が更けると同時に洛陽へ戻るで!」

言うが早いか張遼自身も帰還の準備へ向かった。

何が起こったかいまいち把握できないが、とりあえず洛陽へ後退するみたいだな。

つまり、俺の出陣は正解だったみたいだねえ。

まあ結果論だが。

「……………虎牢関が無人？」

「はい。袁紹が偵察を放ったところ、中には呂布どころかネコの子一匹いなかったそうで」

「何の罠かしら」

「分かりません。呂布も張遼も華雄も健在な現状、虎牢関を捨てる利点はありませんし」

「虎牢関が落とされた後なら本土決戦も考えられるけど……………董卓軍としてはこのまま現状維持の方がこちらの兵力を削れるはずよね」

「もし都での籠城戦となると、民にも心を配らねばなりません。それをするくらいなら、兵しかない砦で籠城した方がはるかに負担が少ないはずです」

「やはり罠かしらね」

「そうとしか思えません。どこかの馬鹿が功を焦って関を抜けに行ってくれば良いのですが……………」

「華琳様ー。今連絡があつて、袁紹さんの軍が虎牢関を抜けに行つたみたいなのー」

「……………」

「……………」

「……ここは素直に馬鹿に感謝しとこうかしら。袁紹が無事に関を抜け次第、私達も移動を開始するわよ」

「お、女も金も好きなだけやる！だから頼む！命だけは……」

張遼が突き殺した仲間を見、床へ額をすりつけ懇願する肥えたおっさん。

その惨めな姿も、屑な台詞も反吐が出る。剣を一閃し首を刎ねる。

似たような死体は数体あり、室内に溜まったむせ返る様な血の匂いが鬱陶しかった。

「全部片付いたみたいだな」

「そつやな。別に一刀までこない嫌な役やらんでもよかったやで？」

洛陽への道中、事の次第を聞かせてもらった。

簡単に言えば、十常侍つー奴らが董卓に手を出そうとしていたらしい。

董卓とは十常侍を始末する前に紹介され会ったが、これまた可愛ら

しい子供だった。

星の話だとこの子を侍女として自分に侍らせていたらしいが、大納得だ。俺でもそうする。

ああいう女の子は後数年立てば立派な美女に化けるだろう。

とまあそんな董卓に手を出そうとしてた十常侍に俺も苛立ちを覚え、今に至る。

「俺がやりたいと思ったからやっただけだ。こんなおっさんに女の子はやれん」

言うなれば董卓はまだ青い果実だろう。数年の時を得、赤みを帯びて食べごろを迎える。

「月にまで手え出す気なんか……銀華見たいにちゃんと思いつてるならうちは構わんけど、詠が黙つとらんでえ」

賈？か。癖の強そうな女だったが、ああいう女に自分を惚れさせ、素直にさせるのが醍醐味ってもんだと俺は思っている。

なんにせよ、今は結果を報告しに行くか。

「そう……ありがとね」

張遼と俺からの報告を受け、眉を顰め顎に指を沿え思案する。

「詠、ここまで来たら後には引けんで？」

「分かってるわよ。分かってる……けど」

賈？は董卓に心酔しているようだな。

この戦で董卓の命を繋げるためには、勝利が逃亡の二択。袁紹により連合まで組まれたこの戦。連合の勝利では、恐らく董卓の首無しに治まりはつかないだろう。

よって逃亡も無理。となると、この劣勢の中勝つしかないわけだ。賈？の中ではその勝利への図式が描けていないのだろう。

「心配しないでいい。何せ俺がいるんだからな」

笑みを浮かべそう言うが、賈？は大きな溜め息を吐く。

「新顔で出所もわからないあんたが何言ってるのよ。霞が言うから一応起用はしてるけど……」

まあ普通はそんな反応だな。

と、一人の兵が駆け寄り膝をつける。

「賈？様、張遼様！こちらにおいででしたか！」

「何かあつたんか？」

「はっ。地平の向こう、虎牢関の方角より大軍団が迫っている様子。恐らく、連合軍かと……」

「相変わらず早いなあ……総員に戦闘準備を通達！今度こそちゃんとした籠城戦やし、虎牢関よりも長期戦になるで！」

さて、第三ラウンドの始まりか。
勝利のために頑張りますかねえ。

洛陽へ（後書き）

うーむ……話を展開させるのが難しいな。
今回は話を早く進めるために会話を大目にしました。

洛陽戦 1（前書き）

大学ってこんなに忙しいものなのか……
更新が滞って申し訳ない……

洛陽戦 1

「うーん……」

斬山刀を肩に担ぎ洛陽を見つめる文醜。
何故か無表情で唸っていた。

「斗詩ー」

「なあに文ちゃん？」

「一刀、あたいらの味方じゃないのかな」

傍らに居た顔良は眉間に皺を寄せる。
数秒思案した後、首を横に振った。

「……違うよ、きっと」

蘇った記憶を辿り、一刀の面影を偲ぶ。
先日会った一刀は、獣の様にギラギラと瞳を光らせていて、顔良の
知っている彼のそれではなかった。

「でも」

だが最後に見せた、去り際の視線。
突然の接吻に頭に靄がかかりながらも、感じ取れた心配そうな彼の
態度。

顔良は言葉を続けず、文醜と共に洛陽を見つめる。

「……強かったなあ」

不意をつかれた。

だが確実に、文醜の知る一刀の力量ではなかった。

一合のもと武器を弾き飛ばされ、成すすべなく唇を奪われた。それにより蘇った記憶。あの場面で接吻など、考えられない。

記憶を蘇らせるために行った行動。頭は良くないと多少自負している文醜にも、その程度は理解できた。

「一刀さん本人に聞くしかないよね」

戦に負け、麗羽や美羽、銀華と共に旅した記憶。

そして、一刀の強さ。

二人は武器を強く握り直し、意を決する。

「……おいおい、何でこっちにこんなにくるんだよ」

大した損害無く、董卓軍の総戦力がこの洛陽に揃っている。

なので籠城前に一当てし、できるだけ敵戦力を削ぐ事になった。

まああの呂布を筆頭に、張遼や銀華まで健在なら悪い戦略じゃない。ただ、敵陣の動きが予想を外れた。

今相対しているのは袁紹軍と劉備軍の混合軍。

中央は呂布。左翼に張遼、右翼に俺がいるわけだが、敵の布陣がどうもおかしい。

旗を見るに呂布には星と関羽。そして俺の方に斗詩と猪々子、そし

て張飛。

左翼へ敵将はいないらしく、あきらかに多くの袁紹軍が詰め寄っていた。

何で呂布より多くの武将がこっちにくるんだよ。

銀華は他にやることがあるから外してるってのに。

「一刀――！！！」

敵兵を掻き分けこちらへ突撃してくる影。

……はあ、麗羽らへんに漏らして軍を乱してくれると思ったんだがな。逆効果になっちゃったか。

駆ける馬から飛び降りると同時に、猪々子が切りかかってきた。

初撃を受け止め、数合切り結ぶ。

甘く振られた横薙ぎを軽くないなし、半身で肘を打ち込むが片腕で防がれる。

続けざまに足裏を叩き込むと猪々子は武器を盾にそれを防ぎ、勢いに抗わずそのまま距離をとり構えを解いた。

「はー。やっぱ強いな一刀！前はあんなに頼りなかったのに」

「俺にとっちゃこれが普通なんだがな。前の俺については、今の俺にはよく分かん」

前、というのは麗羽達と旅をした記憶の事だろう。

その時の俺は今じゃ考えられないほど弱く、甘い奴だった。

「でも一刀は、あたいの知ってる一刀なんだろ？」

にやけ顔で聞いてくる猪々子だが、その瞳からは不安が読み取れる。気丈に振舞うその姿に、意図せず微笑がもれた。

「まあ、そうなんだろうな」

俺の返答に満足げに頷く猪々子。

「なら問題無いな。斗詩！」

猪々子の呼び声と共に現れる斗詩。
不安そうな表情とは裏腹に、武器をしっかりと構えている。

「一刀さん。いろいろ聞きたい事があるので、無理にでも着いて来てもらいますよ」

「そう言うことだから。二対一でも文句言つなよ。今の一刀すごい強いから」

おいおい……流石にこの二人を相手にするのは辛いだろう。
じりじりと距離を詰められる。

どうする。やはり戦うしかないのか？

だがここで万が一でも負けてしまえば銀華のいない右翼は敗北を免れない。

思考が固まらないうちに、二人が駆け出した。

「ちい！」

仕方なく武器を構える。と、そこへ小さな影が間に入り込んできた。俺に向き合い正面に立ち、背後からの二人の豪撃を上に掲げた丈八蛇矛で受け止め、なおその表情には余裕が伺える。

「そこのお姉ちゃん達には悪いけど」

武器を上へ弾き、蛇矛の切っ先を俺へ向ける。

「お前は鈴々が倒すのだ！」

影の正体は燕人張飛。

赤髪の少女が、闘志を燃やし俺と相対していた。

洛陽戦 1（後書き）

基本一刀視点

それ以外は三人称としているんですが、多分いろいろおかしくなってますね。

違和感を感じたらご指摘をお願いします。

洛陽戦 2

ついている。

鋭く睨む張飛を見て、俺は小さく呟いた。

張飛は猪々子や斗詩より強いだろう。

だが相手にするならば、張飛一人の方がまだやりやすい。
二人相手では単純に手数で押されるだろうからな。

「ま、待てよ！あたいらは一刀に用があるんだ！！」

「お姉ちゃん達の事情何て知らないのだ」

張飛は聞く耳を持たない。

緊迫した雰囲気の中、斗詩が小さく溜め息を吐いた。

「文ちゃん。ここは退いて右翼の援護に行こう」

「斗詩！？何で……」

「ここで味方同士睨み合っても仕方ないよ。早く右翼に行かないと」

流石斗詩だな。

左翼では張遼が雑魚相手に無双しているだろう。

麗羽の軍の損害は今も増え続けている。

俯いた猪々子は数秒唸り、顔を上げ、叫んだ。

「うがー！！一刀！負けんなよ！！」

「……ああ」

敵に向かってその言葉はどうかと思うがなあ……
猪々子と斗詩は後退し、姿を消した。

残ったのは俺と、先程から体勢を変えず武器を構える張飛。

「名は？」

「劉備が一の家臣、張翼徳なのだ」

「北郷だ。子供は嫌いじゃないが、戦においては容赦しねえぞ」

「鈴々は子供じゃないのだーッ！」

言葉と共に、自身の数倍はある武器を振りかざし俺へ襲い掛かる。
一歩下がりを避けるが、蛇矛は地面すれすれで停止し、真っ直ぐ俺へ
向かってきた。

縦薙ぎからの突き。迫る蛇矛を剣を振り右へ弾く。
捌いたと思いきや、張飛は弾いた蛇矛の勢いをそのままに一回転す
る。

反撃に一太刀入れる前に、左から豪撃が襲った。

「ちい！」

刃先を下に向け両手で受け止める。
が、咄嗟のため踏ん張れない。

「うりゃあああー!!」

張飛はそのまま蛇矛を振り切った。

両足が浮き、体が空中に投げ出される。

急場での防御にしたってそりゃねえだろッ！

背中から無様に着地。後転一回から両足で踏ん張り無理やり勢いを殺した。ホッとしたのも束の間、しゃがんだまま剣を振る。

刃が交差し、大きな金属音が響いた。

なんとか追撃を防いだが、鏑迫り合いに持ち込まれた。

ガリガリと耳障りな音が鳴る。

体勢が体勢なだけに満足に力が入らず拮抗せず押し込まれる。

身体事振りぬかれる前に、刃を寝かせ斬撃を逸らした。

真横に振り下ろされた蛇矛。好機と反撃に移ろうとするが、思い直し距離をとる。

張飛の武器、丈八蛇矛。

脅威なのはその武器の長さ。俺の持つ剣では間合いが違いすぎる。

しかも張飛自身の臂力の高さから、振りが大きいにも拘らず隙というものがない。

どうしたもんか……

荒れた息を整えながら考えをめぐらしていると、何故か張飛が目を輝かせていた。

「楽しいのだ！」

「あん？」

「北郷と戦うのは楽しいのだ！愛紗とかとの戦いとは全然違うのだ！」

はしゃぐ様子はまさに子供。
戦いつつても俺が一方的にやられてるだけじゃねえか。馬鹿にしてんのか？

張飛は再び武器を構える。

打開策は浮かばない。これは腹を括るしかないらしい。
剣を両手に持ち直し、上段に構える。

横撃への備えは皆無。しかし、張飛に勝つにはこれしかない。

「うりやりやーッ!!」

先に動いたのは張飛。

駆け出し構えた蛇矛を横に薙ぐ。

俺は張飛が駆け出した瞬間、大きく一步前進し渾身の力で剣を振り下ろした。

鈍い音が重なる。

張飛の一撃は俺の脇腹へ食い込んできた。しかし、俺が前進したため刃ではなく柄が。

そして俺の一撃は……

「ぐ……うう……殺す気で、振り切ったん、だが……」

武器を手放し、地に倒れこむ張飛。

俺の剣は張飛の額に裂傷を刻んだだけだった。

振り切れなかったのは、恐らく鏑迫り合いのとき刃が潰れたんだろ
う。

だが衝撃を頭のみで受けたんだ。気を失うのは当然だった。

周りの蜀兵は慌てふためいている。

まさか張飛が負けるとは思っても見なかったんだろうな。
鈍い痛みを放つ腹部を無視し、声を張り上げる。

「劉備軍が将張翼徳！この北郷が討ち取った！！」

次の瞬間自軍から鬨の声が響いた。これで士気は申し分ないだろう。
敵將の居ないこの右翼、俺が居なくても圧勝できるはずだ。

無理をしたせいで視界が一瞬暗くなり、足がふらついてしまう。

一撃もらっただけでこの様か……

部下に張飛の捕縛を指示し、俺は洛陽へと戻った。

洛陽戦 2（後書き）

難産だったぜ……

洛陽戦 3（前書き）

えーと

この話のあとがきに、一刀さんについてのネタバレっぽいものを書きます。

正直ここでそれを書いとかなないと納得がいかないものになってしまいそうなので……

もしこの話を見て、ストーンと納得できたようでしたら、あとがきは飛ばしてください。

納得できなかった方は、あとがきをご覧ください。

恐らく、納得できる方は少なく、あとがきを見ても納得できない方がほとんどだと思いますが、何分思いつき要素の多い稚作なので、目を瞑っていただけると助かります。

洛陽戦 3

張飛を捕えたその後、右翼は案の定華雄軍が圧勝した。左翼も斗詩達の援護甲斐無く張遼の活躍により大勝。中央の呂布は抑えられ、均衡したまま。流石の呂布も星と関羽の二人には手を焼いたらしい。

「やるじゃないあんた」

軍議の場。一通り戦況を伝え終え、賈？が俺に労いの言葉をかける。銀華のいない右翼を勝利へ導き、劉備軍の将を生け捕った。自分で言うのもなんだが、素晴らしい功を上げたな。

「この戦が終われば、正式に将に取り立ててあげても……」

「まだ勝てるかもわからんのに、終わった後の話なんて意味が無いだろう。初戦をうまく捌けただけで浮かれてるのか？」

「なっ！そんなこと……」

一瞬、怒りに顔を赤くした賈？だったが、すぐに表情を変え冷静になる。

「そうね、今するべき話ではなかったわ。それじゃあ明日の事だけど……」

と、明日の戦での戦略を伝え始めた。

まあ、浮かれる気持ちも分らなくは無い。

初戦を大勝で収められたおかげで、戦の流れはこちらにある。

賈？の考える未来にも、希望が見えてきたのだろう。
だが、油断は許されない。

相対的に見てまだこちらの劣勢は覆せていない。

斥候の報告によると、明日に出陣する軍は曹操軍と袁術軍。

曹操軍は兵一人一人の錬度が高いらしく、袁術軍客将孫策の持つ軍も、精鋭揃いと聞く。

「……儘ならないな」

このまま勝てるならいいが、そううまくいかないだろう。
逃げ道を作つといたほうがいいか……

「うー、早く解放するのだー!!」

洛陽の牢獄。後ろ手で縛られ頭に包帯を巻いた張飛が何やら喚いている。

「よう。元気してるか」

鉄格子を挟み相対する。

張飛は俺の顔を見ると、鋭い眼光で俺を睨んだ。

「……鈴々を解放するのだ」

「できるわけないだろ。お前は俺と戦つて負けて、捕虜になった。
選択できる道は二つ。降るか、死ぬかだ」

「なら殺すのだ」

迷いなく、即答される。

「董卓軍に降るくらいなら、死んだ方がましなのだ!!」

何故張飛はここまで董卓軍を毛嫌いしているんだろうか。

……ああなるほど。董卓軍が暴政を働いているという偽報を鵜呑みにしているわけか。

「なら、話をするか」

見張りの兵に命じ鍵を開けさせ中に入る。

張飛へ近寄りしゃがむ。

眼前にある張飛の眼からは、ありありと敵意が読み取れるが、気にせず俺は話し始めた。

董卓は暴政を行っていない事。

権力争いに巻き込まれ、結果諸侯の妬みにより捏ち上げられたこと。むしろ、大義は連合ではなくこちら董卓軍にあるということ。

全てを話し終えたが、張飛の表情は変わらない。

「そんな嘘で、鈴々は騙せないのだ」

聞く耳持たずか。できれば使いたくなかったが、そうも言ってもらえない。

計画の通り張飛を動かすには、これしか手はないだろう。

「そうか。なら……」

張飛の顎をとり、正面へと向けさせる。

「これでもか？」

言葉と共に唇を奪う。

瞬間、星の時と同じくある光景が脳裏に浮かんだ。

活気のある大通り。両手を広げ楽しそうに微笑む張飛が、俺へと振り返る。

『鈴々はみんなが幸せになるために戦うのだ』

何気なく、当たり前のように言った言葉。それが張飛の行動理念…

…信念なのだろう。

頭を巡る一昔前の日々。

ああ、この信念を貫き通す張飛の強さに、俺は何度も支えられたんだな。

『だから、鈴々も幸せでいいよね？』

『もちろんだよ。鈴々が幸せでいてくれないと、俺が困ってしまう』

俺は張飛を真名で呼び、頭を撫でる。

『ずっと、幸せでいてくれよ……？俺の隣で』

『心得たのだっ！』

臭い台詞を吐きやがる。

そう自分自身に毒を吐くと。急に目の前がフェードアウトした。

「ッ」

気が付けば、地面に寝ていた。しかも上には張飛が乗り、顔を俺の胸へ擦り付けている。

「お兄ちゃん……お兄ちゃんのだ……」

涙を浮かべ嬉しそうに微笑む張飛に、俺は鼻白む。
星の時と同様、俺に蜀の記憶は戻っていなかった。
ただ、蜀で張飛とどのように過ごしていたかなどが思い浮かぶため、
星の時よりは記憶が戻っているのだろう。

「何でいなくなったのだ……鈴々は、お兄ちゃんがいないと幸せじゃないのだあ……」

いやいやと首をふる張飛の両肩に手を置き、距離を取る。

「俺には、蜀でお前たちと過ごした記憶が無い」

張飛の表情が固まる。

少し、胸が締め付けられるような錯覚に陥るが、話を続けようとす
る。

が、その前に張飛が口を開いた。

「それでも、お兄ちゃんはお兄ちゃんのだ」

その台詞に、俺は訝しげに眉を寄せる。

「お姉ちゃん達との事を覚えてないのは、すっごく悲しいのだ。でも、鈴々はわかるのだ。お兄ちゃんは、あの時のお兄ちゃんと変わってないのだ」

やはり予想通りの返答。

「ならわかるな、俺が言った事が本当だと」

「信じるのだ！」

先程とは正反対の返事を、満面の笑顔で答える。

「……この後の扱いは追って通達する」

そう言い立ち上がると、張飛は悲しげに瞳を潤ませる。舌打ちし、張飛の頭を少し乱暴に撫で、牢を後にした。

「ッ!!」

壁を殴る。

顔を俯かせ思い返す。

張飛の悲しげな表情を見ると、胸が締め付けられた。

去り際の表情を見かね頭を撫でた。

以前の自分では考えられない事。

体の内から、自分が自分でない何かに侵される感覚。

記憶を呼び戻す際、こんな副作用みたいなものがあるとはな。

「……俺は、北郷一刀だ」

静かに自分の名前を紡ぎ、歩き出す。
計画は順調。あとは張飛にまかせるだけだ。
俺は自分の仕事をするでしょう。

洛陽戦 3（後書き）

一刀の記憶は恋姫達との接吻で蘇るのはお分かりいただけたと思います。

ここで、一刀にある記憶は4つ、蜀、呉、魏、漢です。

ここらへんはタイトルの『五周目』でわかると思います

今、作中では一刀の記憶は漢全くと蜀ちよつとが蘇っています。

まだ作中の一刀は魏と呉のルート記憶を持っていることは把握していません。

ここからですが、この話の最後に感じた一刀の憤り。

これが何故現れたのかというと、単純に星の時には初めての体験でそこまで感じとることができずにいたから。

そしてなぜ漢ルートの時に憤りを感じなかったかというと、華雄を抱いた事で、漢ルート全ての記憶が戻ったからです。

そして、記憶が蘇る事によって一刀自身にも何らかの（正確に言うとは完全なネタバレになるので控えます）影響がでています。

こんな所ですかね。もしこのあとがきが不要だと思う読者様がいましたら、連絡してください。削除も考えます。

洛陽戦 4（前書き）

お久し振りです。

長らく書いてないせいか一刀の口調が安定しないなあ。

洛陽戦 4

鈴々を捕らえた翌日から籠城戦が始まり、十数日がたった。今のところ、連合軍の昼夜問わずの猛攻を防げている。

しかし、いくら時間毎に相対する軍を決め敵に当たるとしても、総兵力の差故か、将や兵からは疲労が見てとれるようになった。

賈？や張遼はたまに欠伸を噛み締める程度だが、呂布や陳宮は軍義中である今も眠たそうに目を擦り睡魔に抗っている。

因みに俺は至って普通だ。銀華が何故か元気なこともあり、副官である俺の負担が軽いのである。

「不味いことになったわ」

そんな何処か締まらない軍義の中、賈？が苦い顔で話を切り出した。曰く、兵糧不足とのこと。

反董卓連合以前から諸侯からの妨害を受け、戦前までに満足に溜める事が出来なかったのだ。

まだ今日明日で無くなる程ではないが、このままでは確実に兵糧が切れ、敗北は必死。

董卓軍の重鎮総出で思案するが名案は出ず、そうこうしているうちに敵襲を知らせる伝令がやって来た。

「向こうはこっちに考える時間も与えんつもりやなあ」

愚痴をもらし、張遼は溜め息をつく。

結局何の成果も無く、軍義は終了した。

「賈？」

「何よ」

視線を変えず。余裕の無い表情で返事をされる。
よほど追い詰められているようだな。

「董卓を救いたいのか？」

「っ！当たり前じゃない！でも、どうすればいいか私には……」

激昂し、怒りと悔しさを露にさせる。

その根元は相手である連合であり、この状況を打破する策が考え付けない自分自身だろう。

俯き再び思案に戻ろうとする賈？に、救いの手をさしのべる。

「俺に考えがある」

ハッと顔をあげ、期待の籠る視線を俺に向ける。

「成功すれば、董卓はこの戦を必ず生き延びるだろうな」

「なっ！？そんな策あるわけ……」

「聞くか聞かないかは賈？の勝手だが、このままだと連合に負け董卓は死ぬしか無いだろうなあ」

自分でもわかるほど意地の悪い笑みを浮かべ煽る。

「……聞かせてちょうだい」

拳を震わせながらキツと俺を睨み答える。
食いついたな。

「おいおい。ただで教えるわけ無いだろう？かの名軍師賈文和様ですら思い浮かばなかった名案だぞ」

一瞬怒りに顔を朱に染めるが、煽られていると分かったのだろう。
自嘲気味に息を吐き口を開く。

「生憎だけど、うちの軍庫に大したものはないわよ」

正規の方法で兵糧を買えないのであれば、裏を頼る他無い。
大金を支払い、なけなしの兵糧を手に入れていたとの事。

しかし俺には全く関係ない。俺が望む対価は目の前にあるんだから
なあ。

「何、金なんていらん。賈？が俺の女になればそれでいい」

言ったと同時に頬に衝撃が走る。

「大した下種ね。聞かなかったことにして上げるから、さっさと自分の持ち場に帰りなさい」

もう言うことはないと背を向ける賈？。

俺は叩かれた頬を撫でながら、小さく呟いた。

「さて、いつまで持つかねえ」

数日後。とうとう兵糧の底が見え、尚連合軍の熾烈な攻城は続き、もって後三日位かと自室で心算していると、突然扉が開かれた。そこに立つのは、悔しそうに唇を噛み締め此方を睨む緑髪の少女。俺はつり上がる口角を隠さず、少女を部屋の中へ招き入れた。

洛陽戦 布石（前書き）

書いててあまり楽しくないけど書かないといけない話。

洛陽戦 布石

「という訳なのだ」

連合軍駐屯地劉備軍天幕。

敵軍に捕らわれた張飛がひょっこり帰ってきたため、劉備軍重鎮が集まり話を聞いていた。

曰く、董卓軍が行っていると言われる暴政は誤りであり、戦前の洛陽は平和そのものであったとのこと。董卓は権力争いに巻き込まれた被害者の一人であること。その話を聞き劉備や関羽は驚き、軍師である諸葛亮と鳳統は目を伏せた。

「そんな……なら私たちは……」

顔を青ざめさせ嘆く劉備に、今まで黙っていた趙雲が口を開く。

「ふむ。桃香様の信念とは正反対の事をしていたわけですね」

「星！貴様あ！！」

趙雲の言に激昂する関羽。

やれやれと鼻白み続ける。

「自分で情報の真偽も確かめずにいるからこうなるのですよ。もっとも、我が軍師達とはつくに気付いていたでしょうが」

「なっ！」

関羽が目を向けると、軍師二人は潤んだ瞳を上げ言った。

「申し訳ありません桃香様！桃香様の理想は重々理解していましたが、まだ小さな私達の軍には名声が必要不可欠なんです……」

「桃香様の理想を叶える為にも、この事は二人で黙っておいたんでしゅ……」

下瞼に涙を溜めながらの謝罪に関羽もたじろぐが、尚も食ってかかろうと口を開いた所で劉備が待ったをかけた。

「待つて愛紗ちゃん。二人は私達の事を思っ黙っててくれてたんだから、攻めちゃだめだよ」

「ですが……」

「そもそも、星ちゃんの言う通り私がちゃんと自分で知ろうとしなかったのがいけないの。だから、ごめんなさい」

軍師二人に頭を下げる劉備を、回りが必死に止めにはいる。

「桃香様！主がその様に簡単に頭を下げては示しが……」

「ううん。これは必要な事だよ。星ちゃんもありがとう。私の過ちを叱ってくれて」

（何と。主のいない桃香様は何処か仕えるに物足りないと思っ
たが……）

一刀のいない劉備を、趙雲は自分が厳しく当たり育てようと思っていた。

しかし、今の言葉を聞き考えを改める。

「……いえ、私こそ過ぎた事を。いかなる処罰も受けましょう」

「処罰なんてしないよ。これで反省はおしまい。どんなに悲しんだって戦の前には戻れないんだから、今から私達ができることをやらないと」

真剣な顔つきで洛陽を見つめる劉備。

「私は、董卓さんを救いたい」

「ふふふ」

先の会議。

あの様な凛々しい桃香様は、前の記憶を辿っても滅多に無いだろう。今の桃香様は前には無い強さがある。

時代を繰り返したという不可解な記憶が原因なのだろうか。

しかしこの記憶が桃香様にもあるとは限らない。

まあ、この事については考えても埒が明かないので置いておこう。

「……主」

鈴々を負かしたという華雄隊副将北郷一刀。

その名を聞いたとき、不思議と納得がいった。

月達に課せられる汚名。それをどうにかしようとするが叶わず、な

らばと自分が月達に味方をする。

やはり主は、私の知っている心優しき主のままなのですな。
加えて私や鈴々をも上回る個の武。

主よ、そんなに魅力的になられては参ってしまいますぞ。

「星―！」

主を想い一人耽っていると、鈴々がこちらへ走って来た。

その瞳には何故か期待の意が読み取れる。

鈴々は私の前で立ち止まり、口を開いた。

「星はお兄ちゃんの事、覚えてるの？」

「なっ！鈴々、お主……」

予期せぬ不意打ちに驚くが、主と接触があつたのなら不思議ではないか。

不安そうに私をみる鈴々へ、頷く。

すると、鈴々はほっとした様子で息を吐いた。

「よかったのだ。お兄ちゃんが、星は覚えてるって言うてたから……」

鈴々は緩んだ表情を引き締める。

「星にお兄ちゃんから伝言があるのだ」

主からの伝言。

私は期待に胸を膨らませながら話に耳を傾けた。

洛陽戦 布石（後書き）

ちなみに何故月達の事を星は桃香達に教えなかったのかは、次話説明されるかと思えます。

このフェイズは次回も続きます。次回で終わらせたい……

洛陽戦 布石 2（前書き）

自分の一番好きなキャラクターに全然絡んでないという。

好きなキャラクターは勿論優遇させたいけど、その為にストーリーを曲げたりは絶対にしたくないジレンマ。

まあ予定ではそろそろ絡めそうなのがするからそれまで頑張ろう。

恋姫キャラクター視点だと英語とか現代語が使えないのが辛いなあ

……

洛陽戦 布石 2

鈴々が主から言付かった内容。それは月と詠の身柄についてであった。

鈴々は多少言葉足らずだったが、要所は確りと伝わる様に話してくれたので問題は無かった。

月達の事だが、私が話した桃香様の人となりを考え、劉備軍へ反董卓連合の真意を伝える。知らなかったのなら桃香様は必ず月達を助けるために行動するだろうし、既に知っていたとしても、それを把握しながら反董卓連合に参加したのであれば、何かしら考えがあると思っただけ。

方法としては、捕らえた鈴々に情報を与え解放する。この際、情報を信じさせるために鈴々の記憶を蘇らせたとのこと。他からしてみれば利の無い解放に見え怪しまれるため、鈴々自身が会話を盗み聞き隙をみて脱出した事になっている。

それからの策は、前の記憶と全く相違の無いものだった。

月達を董卓御付きの侍女に見立て、保護する。

私はその手助けをすればよいとのこと。

この策を聞き、何故？と思う。

私には桃香様に仕え天下三分の計を成した記憶を持つ。

しかしこの記憶が今私のいる世界に通用するかは確信が持てなかった。

この世界には、もう一人の主である桃香様はいないかもしれない、戦を共にした戦友達も、全員が存在するかどうか分からない。

常にその様な不安を持つが故、月達の事を聞いたときも、前の記憶とは異なるのかもしれないと確信を持てず進言しなかったのだ。

主は未だ我らとの記憶は蘇っていないという。それなのに主は話で

聞いただけの、しかも人となりという極めて不確かなものを考慮している。

確かに、桃香様は前の記憶と違わぬお人であったが、もちろん違う可能性だってあったのだ。

根拠の無い主の考えに頭を巡らせるがわかるはずもなく、気が晴れず恨み事ばかりが浮かんでくる。

せっかく再会できたというのに、なぜ何も告げずに行ってしまったののですか。主が月を助けると言うのであれば、不安を払拭してでも着いていったというのに……

そもそも、伝言の内容が事務的なものしかないのが頂けない。久しぶりのことから、愛の囁きの一つや二つ伝えるべきである。

「はあ」

女心に疎いのは、今も昔も変わらないということか。
とにかく主に再び会うには、この戦を終わらせる必要がある。

「早く会いとうございますぞ、主」

「それを着ける」

北郷は私を部屋に入れると、寝台に何か放り投げそう言った。
寝台に寄り見てみると、手枷と黒く細長い布。
意図が分かり睨み付ける。

「この……変態！」

私の罵倒にも、北郷は卑しい笑みを変えない。

「董卓を救いたいんだろう?」

その一言に唸ることしかできない。

こいつが本当に月を救える方法を知っているのか確証は無い。

だが、他に方法がないのだ。

このままでは敗戦は確実。屈辱を耐え抜く覚悟でここに来たが、その覚悟が早々に揺らいでしまう。

私は震える腕で服に手をかけるが、北郷が待ったをかけ、先に拘束具を着けると言う。

拘束具を着ければ勿論服を脱ぐことはできない。裸になるには切るか破くか……つまりそういうことだろう。

本当に変態ね、こいつ。

洛陽戦 布石 2（後書き）

星は盛大に勘違いして主人公への思いを募らせてますね。

こんな穴だらけの策が臥龍鳳雛が感付かない筈はないと暗躍フェイズを書こうと思ったけど、話が複雑になるし面倒なので、鈴々が帰ってきて浮かれてたってことにしてください。何たって幼女だし、そういう失敗もあるよね！

次話はR - 18予定。本番は濁す感じにはしますが、直接的な表現が多くなりそうなので一応そうします。

途中から年齢制限は変えられないのは面倒だなあ。

久し振りの……（前書き）

R - 18です。

なるべくエッチくならない様にしたけどこれが限界。

濡れ場が要らないという方と、18歳未満の方は次話までお待ちください。この話を見なくても理解出来るようになんとかします。

久し振りの……

言われた通り拘束具を着けると、視界が暗闇に包まれる。

手枷をかけられ手の自由を奪われると、背後から持ち上げられ寝台に座らされた。

恐らく、今私は後ろにいる北郷の足の間に収まっている状態だろう。これから起こる事に自然と体が強張る。

「じつくり可愛がつてやる」

頭を撫でられながら耳元で囁かれる。

こんな男に体を触られること事態生理的に拒絶反応が出そうだが、何故だか私は頭を撫でられ安心してしまった。

不可思議な感覚に戸惑う間も無く、首筋に暖かい感触が這う。舐められている。そう理解するのに時間はかからなかった。

舌が這う毎に体に甘い刺激が走る。不快感など存在しなかった。

「はふ……」

意図せず吐息が漏れる。

すると北郷は、後ろから抱き締め服の上から手を這わせ始めた。お世辞にも気持ちいいとは言え無い、角張った男の体の感触。

しかし、ずっとそうしてほしいと思う自分がいた。

どうしようもなく心が暖まり、安心するのだ。

這わされていた手は胸の辺りで止まり、乳房に触れ始めた。手付きは厭らしくも優しく、こそばゆい。

「随分……ん……優しいのね……ふぁっ」

馬鹿にするように言ったが、返事は体に返された。

「は……ん……ふう……あ、あんだねえ……んあっ」

胸を捏ねながら、先端を執拗に攻めてくる。

断続的に襲ってくる快樂の波に、正確に言葉を紡げない。

「言っただろ？じっくり可愛がるって」

手が止まり、代わりに熱っぽい吐息が耳にかかる。

「賈？から俺を求めるまで、な」

その言葉を聞き、怒りで反射的に振り向こうとするが、北郷が強く抱き締めてきたため困難だった。

「私から？あんたを？冗談じゃないわ！」

私の怒り何て我関せずといった様子で、手の動きが再開される。

片方は胸へ、そしてもう片方は下腹部へいき、服の中へ入ってきた。下着越しに秘部をなぞられる。

今までよりも大きな刺激に、腰が浮いてしまった。

「気持ち良さそうだなあ」

嘲笑が混ざった声色。

文句を返そうにも身を襲う快樂にそれどころではなかった。

「んう……っ、ん、……あ、は、や、やめ……」

秘部への刺激は速度を増していく。
逃れようにも身動きがとれず、嬌声が口から漏れ、何かが登り詰めてくる。

「な…にこれ…んっ、何か…あ、くるう……………」

なにも考えられず、視界が真っ白になる直前、北郷は手の動きを止めた。

「な、何で……………」

意を介さずに口から漏れた言葉。言った後にはっとするがもう遅い。

「ん？続けてほしかったのか？」

「そ、そんなわけ…………んあっ！」

言い終わる前に手の動きが再開される。
不意打ちの刺激に大きな嬌声をあげてしまった。

「賈？が俺を求めるまで」

頭に快樂の火花が散る最中、北郷は楽しそうに言う。

「そしたら、果てさせてやる」

登り詰める直前、また手の動きが止まった。
どうしようもなく、胸と秘部が疼く。

「上等よ……」

でも、耐えて見せる。

この男の思い通りになんてなって堪るものか。

「ん、や、ああっ、んあ！ああっ！」

「終わりと」

「あっ！……そん……なあ……」

賈？をなぶり始めてから3時間は経っただろうか。

あれから少しずつ服を破っていき裸にし、全身を撫で回したり、耳や首筋、乳首等を甘噛みしたりと、イク寸前まで好き放題女体を弄んだ。

目の前にいる裸の賈？は、寝台を愛液で汚し、嬌声を抑えることもやめ、体の疼きを沈めようと股を擦り涙目で此方を見ている。

目隠しは既に外した。視界を遮ることによって刺激へ敏感にさせるために着けさせたので、今の状態ならもう必要ないだろう。手枷は自慰をさせないためにまだつけている。

「お願い……もう、疼いて仕方がないの……」

一寸前くらいから俺へ懇願する態度を見せ始めていたが、はつきりとしないので無視していた。

だがこれは……

「ください……」

「何を？」

「北郷のを、私に、ください！」

もつと汚い言葉を期待したが、まあ良しとするか。

正直な所俺もそろそろ限界だった。冷静に考えてこれは俺へのお預けでもあるわけで、結構辛かったのだ。

服を脱ぎ、手枷を外し怒張を秘部へあてがう。それだけでも、賈？身を震わせ軽く果てた。

「いくぞ」

「ふっ……………か……………はっ……………」

一気に最奥まで入れる。

すると、怒張全体が圧されとてつもない快樂が襲ってきた。賈？は足先までピンと伸ばしながらイっている。

「ほん……………ご、おね……………がい」

快樂から呼吸もまともにできないらしく、息が絶え絶えだ。両手を俺へ伸ばし舌先を少しだけ出し言った。

「して……………」

この時の賈？は反則なまでに可愛すぎた。

記憶云々を考える以前に、既に行動しており、賈？の口内を貪っていた。

俺の馬鹿野郎。

そう自虐すると同時に、意識が光に包まれた。

久し振りの……（後書き）

詠ちゃん堕ちるのはやいー
個人的に詠は淫乱なイメージ。
むつつりっばいよね。

詠の深慮（前書き）

前話を見てない人は、とりあえず詠ちゃんはチヨメチヨメ中に記憶が蘇ったよってことでお願いします。

詠の深慮

「これで……大丈夫ね」

小さな荷袋を寝台へ放りその横に座る。

これで逃走の準備ができた。後は時が来るのを待つ。

ふと、寝台の布団が目に入った。何気なく撫で、思い返す。

睦事が終わり、落ち着いてからまず頭に浮かんだのは恨み言。
一刀の胸に額をぶつけ、拳を叩く。

『何で、何で居なくなっちゃうのよお……』

こいつが居なくなってから、月から笑顔が消えた。
月だけじゃない、蜀の皆だって、私だって……

『あんたが居なくちゃ……うう……えぐっ』

嗚咽で言葉が紡げない。手の動きも止まり、私の泣き声だけが部屋に響く。

と、頭に温もりを感じた。顔を上げると、一刀が困ったような、優しい笑みを浮かべ私の頭を撫でていた。

『ごめん。ごめんな詠』

それだけで、一刀のその笑顔を見ただけで、私が抱いていた恨み辛みが溶けてしまった。

心の内から感じる暖かさ。とても久しぶりだった。そう、久しぶりなのだ。

漸く頭に浮かんだ当然の疑問。追求する前に、一刀の様子が変わった。

微笑みから急にはつとし、撫でていた手を止め、私から離れた。反対を向き、頭を抑え唸っている。

『ね、ねえ、急にどうしたのよ』

『……何でもない、大丈夫だ』

一刀はそう言い寝台に座る。

隣に感じていた温もりが遠ざかり、寂しさを感じる。

『すまない賈？。無意識に真名を呼んでしまった』

『え……』

意味を図りかねる。

どういうことかと聞く前に、一刀は説明を始めた。

私に蘇った記憶の事。歴史を繰り返すという不可思議な現象について。

そして、今の一刀の事。

戸惑う私に、一刀はこの戦での月を助ける策を説明し始める。

簡潔に言くと、月と銀華と共に、銀華が前の戦中一刀の命で作らせた抜け道を通り、蜀へ保護される。

そのための根回しは既に済ませておいたとのこと。

矢継ぎ早に説明を終えると、一刀は服を着て部屋を出た。部屋に残された私は、呆然と扉を見つめていた。

あの後、疲れからすぐに寝てしまったが、今日起きてからこれまでの間考える時間があった。

歴史を繰り返しているこの現象。

もっと早く自覚していれば、この戦自体を無くせたかもしれない。そう考えると歯噛みしてしまうが、諦めるしかないだろう。問題はこれからだ。

蜀に保護されるというのは、自分の持つ記憶と同じ。ということは、その後の出来事は自分の知るものであるかもしれない。その時にこの記憶は、大きな利点となるだろう。

もっとも、今の蜀には一刀がないため同じ事が起こるかは分からないが。

次に一刀の事。

私の知る一刀は、あんな性格ではなかった。武も無く、かといって何かに秀でているということもない。

……まあ女の扱いには長けているが。

ともかく、今の一刀は、前、の一刀と比べると別人である。しかし、

『ごめん。ごめんな詠』

脳裏に過ぎる言葉。

あの時の、頭を撫でてくれたあの時の一刀は、前、の一刀の様だった。

「……あーもうっ！訳分かんない！」

腹いせに撫でていた布団を叩く。

昨夜から理解不能な事が多すぎるのだ。

考えを全て纏めるには、時間が足りない。

と、部屋の扉が開く。

斧を片手に銀華が入ってきた。

「連合軍が城門を突破したぞ」

「そう……なら行くわよ」

銀華が頷き、私は荷を持ち立ち上がる。

靄のかかった思考は捨てよう。

今は月を救う事が先決だ。

詠の深慮（後書き）

星や鈴々は直感で物事を捉えて、詠はまず理性を働かせ考えます。だからこの一刀が『何者』なのか図りかねてるんですね。

真実は意外と簡単だったりするのですが……おっとこれ以上は言いすぎですかね。

自重しましょう。

次話は少し時間が遡り、戦の描写で一刀視点になります。

私の小説は視点がころころ変わって見にくいですが、お許しください。

洛陽戦 終戦（前書き）

いい加減感想返信しなくては……

と思っただけ溜まりすぎてむりぽ…………

今日からの感想にはしっかり返信しよう！

きたの確認したらずぐ返信する癖をつけないとなあ

後でとかしてると忘れてしまう。

まあそれはともかく、ようやく反董卓連合編が終了です。

洛陽戦 終戦

城門に取り付いた連合軍の兵。
散り散りになった董卓軍。

張遼は曹操軍に下り、呂布は連合軍の主力に囲まれ敗走。

頃合だな。

俺はすぐに逃げられる様に華雄軍の後方に居たのだが、現状何所を見渡しても剣戟が行われていた。

向かって来る雑兵を斬り伏せ、思案する。

何かあったときのため逃走用の抜け道を銀華に作らせていたが、思わぬ所で役に立った。

銀華には詠と月の護衛を任せた。後から合流すると言い納得させている。

まあ、合流する気は無いんだがな。

蜀に居れば前と同様詠も月も、延いては銀華も安全だろう。

俺は前までと同じ、根無し草に戻るだけだ。

次は呉にでも言ってみるかな。魏は後回しだ。

理由は言わずもがな、曹操が残念体型だったからだ。

別に俺は口りでも構わず愛でれるが、期待を裏切られただけに立ち直れないのだ。

まあ目的は決まった。となればこんな血生臭い場所とはおさらばだな。

「れんどのー、どこにいらっしゃるのですかー……」

喧騒の中聞こえる幼い声。

視線を向けると、少し離れた場所で陳宮がとぼとぼ歩いていた。

周りの兵士もその場違いな光景が視線を向けている。

が、それもすぐ終わり、連合軍と思われる兵が武器を構えた。

あんの馬鹿ッ！

気付いた時には俺は走り出していた。

間に合うわけが無い。

自分の冷静な部分がそう結論付ける。

しかし体は走るのを止めず、狙われている事に気づいた陳宮は顔を強張らせ怯えていた。

敵兵が武器を振り下ろす。

陳宮は腰が抜けたようであの場にべたんと座り込んでしまった。

それが功を奏し、初撃は陳宮の頭上を通った。

しかし敵兵はすかさず追撃を向ける。

そこで漸く辿りついた俺は、陳宮と敵兵の間に飛び込んだ。

恋殿と逸れてしまった。

戦の情勢はすでに決まっている。

恋殿も連合軍の数の暴力に押され、撤退を余儀なくされた。

一緒に居たはずなのだが、行く手を阻む敵兵を対処しながらの逃走。いつの間にか、自分の周りには護衛兵しかいなかった。

恋殿を探しに戦場を駆けるが、徐々に数を減らす護衛兵。

ついには敵兵に馬を突かれ落馬してしまった。

体の痛みを堪え、再び恋殿を探す。

最後の護衛兵も、敵兵と相打ちになり倒れてしまった。

自分は軍師、こうなっては雑兵一人にすら殺されてしまうひ弱な存在だ。

しかしそれでも恋殿を探すしかない。自分を守ってくれるのは、恋殿しかないのだ。

「れんどのー、どこにいらっしやるのですかー……」

声に応える人は居なく、変わりに向けられるのは敵意の籠った視線。敵兵が一人、相對する。

その手に持つ血のついた剣を見て、背筋が凍った。

死にたくない。

迫る死の気配に、逃げると頭が命令するが体は動かず。

その刃が自分に届く寸前、腰が抜けその場に座り込み命拾いした。ほっとする間も無く、再び敵兵は剣を振る。

れんどのお……

震える喉から小さく漏れる言葉。

死を覚悟した直後、視界が何かに覆われた。

「ッてえな！くそが！！」

陳宮に覆いかぶさり、左肩に激痛が走る。

すぐさま体制を立て直し剣を振るい敵兵を斬り倒した。傷を確認するが、斬撃は肩骨に阻まれ深くは無かった。

だが、左腕が思うように動かない。

「説教は後だ。じっとしてろよ」

呆然としている陳宮を左脇に抱える。

陳宮ぐらいの重さなら、言う事を聞かない左腕でもなんとか抱えられた。

あとは逃げるだけだが、一人ならともかく陳宮の事を考えると馬が

無ければ逃げ切れないだろう。

加えて手負いの身。馬を探しに戦場を駆けるには無謀だろう。

――置いていくか？

自問するが、すぐさま却下する。怪我をしてまで助けたのだ。自己満足だが、ここで置いていたら無駄骨にも程がある。

「死ねえ!!」

「ッ！」

襲ってくる敵兵を蹴り飛ばし、倒れたところに剣を突き刺す。

ゆっくり考えている暇は無いか。

と、前方から騎兵が十数向かってくる。敵だ。

やるしかない……か

巻き込まれないよう道を開く兵共を尻目に、俺は真っ向から騎兵団と対峙した。

「ぐ……はぁ……はぁ……ちく、しょう！」

流れる景色。馬の背に縋るように体重を預ける。

血を流しすぎた。背中を斬られ、脇腹を槍に貫かれ、しかし全滅させ馬を奪取した。

後ろに乗せた陳宮がなにやら喚いているが、もはや耳に入らない。
こんなところで死んでたまるか！

内なる叫びとは裏腹に体からは熱が引き、睡魔が襲う。
寒い。眩きは声にならなかった。

手を震わせながらも、落馬しない様手綱を陳宮に渡す。
陳宮が受け取った事を確認し、俺は意識を手放した。

洛陽戦 終戦（後書き）

この一刀は強いですが、対多数は不向きです。

恋姫達のように人外の膂力があるわけでもないんです。

なので、『ドーンッ！』とかいって小隊もろとも吹き飛ばせるわけでもないのです。

さて、手負いの一刀は生きながらえる事ができるのでしょうか。

おや？ねねの様子が……（前書き）

ご都合主義満載の展開。

時間の経過は許してくださいまし。

するすると要所イベントへ向かいたいので。

おや？ねねの様子が……

『一刀……楽しい……日々、だった、ね……』

『ああ……楽しかったよな……！酒飲んで怒られたり、釣りしたり……！でもさ、雪蓮！俺はもっともっとおまえと居たかった！もっと楽しく、笑いあっていたかった！』

『なのに……どうしてだよ！なんで……なんで死んじゃうんだよ！』

『人は、いつか死ぬもの……私、幸せだよ……楽しかったこと、思い浮かべて……死んで、いけるから』

『さよ、なら……かず、と……あなたにあえて——』

『雪蓮っ！……雪蓮——っ！』

「……………あ？」

霞のかかる視界。朦朧とした意識の中、頬を伝う感触を手の甲で拭く。

案の定、濡れていた。俺は泣いていたらしい。

何故かわからない。見ていた夢は忘れてしまった。

「ッ」

寝台から体を起こす。やはり痛みを伴ったが、意識を失う前とは比べるまでも無く軽い。

ここは何処だろうか。

「あ……」

扉が開かれ、視線を向けると呆然とした陳宮が立っていた。近況を聞こうと口を開くが、ふるふると震える様子に噤む。

「か、一刀殿ーっ！」

走り寄り、両手を広げ抱きついてきた。体に走る痛みより、驚愕が勝る。

顔をぐしぐしと俺の胸に擦り付ける陳宮に、頭が追いつかない。

「ねねはもう……目を覚まさないかと……」

強く抱きしめてくる陳宮の頭を優しく撫でる。

とりあえず落ち着かせ、それから近況を聞くか。

現状は把握した。

ここは森に囲まれ、ひっそりと佇む村。洛陽から逃げるよう適当に馬を走らせ、行き着いたらしい。

瀕死の俺を見た村人が急ぎ手当てし、生き繋いだとの事。

それから、行く宛ての無い俺達に空家を貸してくれたらしい。この乱世によく余所者を助ける余裕のある村があったものだ。

そして俺が一番驚いた事。

それは反董卓連合解散から、既に二月が経っていたことだった。二月も村に厄介になり、その間陳宮が一人働き寝たきりの俺を養う。

文面にするとここまで情けない事はないだろう。
大きな借りができてしまった。陳宮にも、この村にも。

「一刀殿！ねねは仕事にいつてくるのです！」

未だ寝台に座る俺に、陳宮は農具を持ち戸を開ける。

基本自給自足のこの村で、陳宮は村人達の手伝いをして収穫の分け前をもらっていた。

俺も手伝うと言ったのだが、まだ怪我が治りきってないと陳宮が許さなかった。

「ああ、行つてらっしゃい」

「はい！」

ぱあ！と明るい笑顔を浮かべ陳宮が家を出た。

俺は立ち上がり、包帯が撒いてある脇腹を擦る。

痛みは少し、傷はほぼ塞がりかかっている。

限度を超えた運動をしなければ、傷が開く事も無いだろう。

壁にかけてあった剣を抜く。陳宮が手入れでもしてくれたんだろう、刃毀れなく刀身が光っていた。

その場で一振り、体が軋む。

やはり、二月も寝たきりなだけあって体が訛り切っている。
当面の目標は身体能力の取り戻しだな。

「なあ」

「どうしたのですか？」

夜。夕食をとっている俺を、微笑みながら見つめる陳宮に尋ねる。

「その、お前は何でそんなに俺に……」

懐いているんだ？と言おうとしたが、止める。

流石にペットじゃないんだし、言葉が悪い。

そんな俺に陳宮は不思議そうに首を傾げる。

「何でと言われますと……ねねは一刀殿に命を救われた際、その背に名君の姿を見たのです……」

恥ずかしそうに頬を赤く染め言う陳宮に、呆気に取られる。
確かに気まぐれで助けたが、そんな打算は無かった。

「お前、呂布に仕えてなかったか？」

正式には董卓にだが。

「もちろん、ねねは恋殿の家臣なのです」

「……賢臣は二君に仕えずって言葉知ってるか？」

「うぐっ……ね、ねねは常識の範疇に納まりきらない人間なのです」

苦い顔から一転、えっへとドヤ顔で胸を張る。

陳宮に助けられている点、それ以上追求するのは止めた。

食器を片付け寝台に入る。陳宮も俺と一緒に布団へ入った。

寝台は一つ、ここに来てから毎日一緒に寝ているとのこと。
まあ相手は子供、性欲は沸かない。

ところでだ。二月も寝たきりの割には、予想以上に体は動き、肉付きも多少減ったぐらいだった。

この時代に点滴などあるはずも無く、何故か不思議に思い陳宮に聞いてみる。と、陳宮は顔を真っ赤にした。

「そ、それはねねが……一刀殿に……」

その、あの、と要領を得ない答えが返ってくる。

無言で暫く待っていると、意を決したように口を開いた。

「……毎日、食べさせてあげていたのですよ」

食べさせる。

この時代に流動食などあるはずも無く、すぐに分かった。

「まあいい、寝る」

陳宮に背を向け、寝る。

火照る顔を見られたくないからだ。

全身を拭く、排泄等の世話は想像できた。

だが流石に、こんな小さな子供に咀嚼させ、口移しで食べさせられていた事を思うと、いくら俺でも恥ずかしすぎる。

「はい、おやすみなさいなのです」

陳宮が寄り添ったのだろう。背に温もりを感じる。
その温もりに、心地よさを感じながら意識を閉じた。

おや？ねねの様子が……（後書き）

ねねをデレさせすぎたと思わなくも無いけど後悔は無い。

ねね可愛いよハアハア

ねねがメインヒロインの小説って少ないってか無いよなあ。

こんなに可愛いのに何故だ！

ちなみに私はロリコンでは無い。断じて、無い。

意識を失っている人に食べ物を摂らせる事については、本当にこの方法（咀嚼&口移し）で出来るかは調べてなくて分からないです。

多分出来ないんじゃないかな……

でもそうしないと二月も寝たきりだと衰弱死してもおかしくないし、復帰までかかる時間が長すぎると思い無理やりそうしました。

恋姫世界は現実と違うし、これも外史設定って事でお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9034r/>

おや？五周目の一刀君の様子が.....

2011年11月17日18時13分発行